



インターネット版 第**4**号(総第8号)

2004. September

## 目次 contents

巻頭言	附属図書館長 富盛 伸夫
随筆 本とインターネット雑感	本学講師 箕浦 信勝
特集 学術情報リテラシー教育と附属図書館 情報サービス係	
図書紹介 ボドゥエン・デ・クルテネ選集	本学教授 石井 哲士朗
台湾語研究事始 伊沢修二の台湾語	本学教授 樋口 靖
展示会に寄せて 現代史に翻弄された本たち	本学助教授 岡田 知子
図書館統計	
図書館からのお知らせ	
図書館講演会の開催のお知らせ	
図書館展示会の開催のお知らせ	
図書館日誌	
編集後記	

## 巻頭言

附属図書館長 富盛 伸夫

長い酷暑の夏を終え、キャンパスにはようやく秋の涼風が吹き抜けるようになりました。新学期に向けて、附属図書館では皆様のご利用をお待ちしています。

例年にない暑さのため(?)でしょうか、7月には連日のように入館者数が2,000人を超え、7月20日には3,258人(自習室やラウンジは含まず)という記録的な利用者数となりました。ちなみに酷暑の12月から2月にも同じような傾向がみられますが、本学の学生数からすると、ほぼ一日一回は附属図書館に足を運んでいる、という計算になります。この利用率は、全国の大学図書館の中でもおそらくは突出した数字でしょう。雑誌を読むためであれ、あるいはメールやレポート作成のためであれ、快適な環境の中で机に向かえるという居心地の良さを大切にしたいと思います。

さて、この6月に開催された国立大学図書館協会の総会で、附属図書館が、文部科学省から全国89国立大学法人の中で特色ある取り組みをしている10の大学図書館の中に選ばれたという報告がありました。プレスリリースもそれに先立って行われましたが、本図書館の進めている「多言語データベースシステム構築事業」は、本学の特色と資源を生かした開発といえます。今年度は5千万円を超える特別経費が文部科学省から配分され、本学所蔵の日本語・英語以外の言語資料の書誌・所蔵データベース化(今年度は特にキリル文字系言語)に取り組んでいます。今後は、多言語対応の入力・検索システムを汎用性の

あるものとして開発するとともに、その成果を実績として示す必要があります。

他方、一般の利用者にはあまり知られていない、つまり外から見えにくい成果ですが、本学が購入して受け入れた図書資料の書誌情報の公開には大きな貢献をしていることを強調したいと思います。附属図書館は、日本有数の書誌データベースを統合管理している国立情報学研究所への新規登録件数が全国の大学の中で一昨年度の8位から、昨年度は全国5位、12,085件へと飛躍的に伸びました。この数字は、本学は小さいながらも他の大学や研究所ではあまり持っていない図書資料が豊富にあること、その整理と公開が順調に進んでいることを示しています。これにより、日本で他の大学等は国立情報学研究所のデータベースから本学が入力した情報をダウンロードすれば、必要な書誌データを簡単に利用できるになっています。これは一例ですが、日本の中で果たしている本学の貢献の証として大いに誇ってよいことといえます。図書館力というものがあれば、本学の附属図書館は全国有数の個性的実力を備えつつあるといえましょう。これはいうまでもなく教員のご協力があったのですが、優れて図書館員の資質と努力の賜物であります。

国立大学法人となり、新たな組織の中での図書館の役割が問われていますが、附属図書館長職は、大学運営組織の中で教育研究評議会の委員として大学全体の中での教育研究の質を高める視点を要求されています。また、併任の学長特別補佐として、学術情報室と国

際交流室の二つの重要な企画・執行組織を担うことになりました。ことに学術情報室は私自身の年来抱いてきた構想の一つで、本学の持てるすべての価値ある知的資源を掘り起こし、日本のあるいは世界の各層の人々に知ってもらうことを目的としています。おそらくはその名の故に、あるいは世間一般からの期待の故に、東京外国語大学は誤解され、見えにくくされています。この大学で実績をあげている多様な分野にわたる教育研究上の成果を公開し、日本にとってはもちろん国際社会全体にとっても必要な存在であることを訴えてゆかねばならないのです。まさに、本学は知的生産の機関として公共財であります。その中核である附属図書館の果たす役割は、ますます重要なものとなってゆくでしょう。

法人化した大学が自己責任において様々な工夫をして新たな時代の波に対応せねばならないことはもちろんですが、一大学が単独でできることは限られています。すべてをひとりでやろうとしても先細りになるかもしれません。そこで、附属図書館も様々な個性を持つ近隣の大学と緊密な協力関係を深め、可能性を拓けようとしています。まず、2キロと離れていないすぐお隣の国際基督教大学との

相互乗り入れをはかります。このキャンパスに移転してすぐに連携事業に向けて協議をすすめ、すでにFD活動や大学院の単位互換制度などでは一部分実現してきましたが、この秋に協定を結び、学部学生を含めすべての学生諸君が相互に利用できるようになります。先日、国際基督教大学の図書館関連施設を見学しましたが、多くの優れた蔵書や先進的設備の点で感服し、勉強になりました。学生証の提示で入館できますので、是非とも、ご利用をおすすめします。

最後に、この秋の企画として、10月25日から11月22日までの期間限定で、カンボジア語貴重図書資料の特別展示「出版文化を通して見るカンボジア現代史」を行います。また、10月27日午後4時30分から研究講義棟101教室マルチメディアホールで、国立西洋美術館長（西洋史学、元東京大学教授）であり本学の経営協議会委員でもある樺山紘一先生による特別講演会を開催します。テーマは「知と技のつどところ - 図書館と博物館と博覧会 - 」で、学生、教職員、一般市民を対象にしたお話ですので、ご期待ください。当日は、お誘い合わせの上ご参加いただけますようお願いいたします。



本学外国語学部講師 箕浦 信勝

数学者であり作家である藤原正彦が『数学者の言葉では』（新潮文庫）の最初の方で、特に将来研究者を目指す大学院生に向けて、われわれの様々な活動のなかに、専門的発達を促す活動と、情操的発達を促す活動があると書いている。専門的発達とは、大学院生であればそれぞれの研究する専門分野における発達である。音楽や美術などの芸術の技術を磨くことも、それを本業とする人々にとっては専門的発達であるし、それを余暇活動として行う人々にとっては情操的発達を促す活動である。藤原は、大学院生たるもの、人生の数年間、情操的発達を犠牲にして、専門的発達のみに没頭する時期が無ければ、将来一人前になることはできないと書いている。

読書にも、専門的発達に結びつく読書と、情操的発達に結びつく読書があることは、容易に考えられる。専攻分野の専門書を読むことは前者であり、（文学者でなければ）文学書を読むことは後者である。

読書というよりはもう少し広げて、文字から情報を得ることについて考えてみる。そこには専門的・情操的発達に繋がるものの他に、それら二つの「発達」につながるとは思えない情報がある。その中には、生活上役に立つ実用的情報と、雑学や流行りの言い方でトリビアと呼ばれるものがある。後者も何らかの形で、人間の精神的安定感に寄与しているのではあろうが、直接的には、専門的・情操的発達につながるとは考えにくく、また実用性も無い「役に立たない情報」である。

インターネットの文字情報を見ると、情

報の質が、出版物による情報とはかなり異質であることに気がつく。オンラインの連載小説であることを銘打っているサイトでもあれば、情操的発達に結びつきそうであるが、ネット上の全情報の中に占める割合はかなり少なそうである。また専門情報も、一見したところの情報量の多さに比べて少ない。書籍や学術雑誌からなら安心してできる引用も、非常に慎重にならざるを得ない。私が引用することがあるネット上の情報は、個人的によく知っている研究者が運営するサイトのものと、世界的に信用性が確立しているかと思われる言語カタログだけである。その他のほとんどは、どこの誰が書いたのかもわからず、たとえ署名があったとしても、それを裏付ける信用性が無いので、引用することはどうしても躊躇われる。専門情報に限って言うと、出版社等によってお墨付きのある旧来の出版物の方が、ネット上のデジタル情報よりも数百倍も信用度が高いというのが現状なのである。

我々ネット社会に生きる人間は、もう既に知らず知らずの内にやっていることではあるが、情報を目にしたとき、その内容から推測して、信用に値するものか否かをその都度判断していかなければならない。同様の取捨選択は本に関しても、「いかがわしい」出版社から出た本を胡散臭げに見るという形で以前からやってきたことであるが、それを日常的にやらなければならないという、面倒くさい時代になってしまったものである。もしかしたら我々は、実は役に立たない情報の海に投げ出されてしまったのかも知れない。



#### 1. はじめに

平成 15 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」において、本学の「26 言語情報リテラシープログラム」が採択されました。このプログラムは、インターネットに代表される情報技術が、世界の「言語と地域」に関する本学の教育を根底から変えつつある状況に対応するため、外国語学部・情報処理センター・附属図書館が全学協働体制で実施しているもので、外国語学部の教育課程全般の情報化を目指しています。附属図書館は、200 台近い利用者端末の設置場所を提供し、情報基盤の整備に協力するほか、本プログラムの一環として開講されている情報リテラシー科目の中で行われる「情報検索」の授業を担当しています。

採択にともなって配分された経費により、無線 LAN や E-learning システムが導入されるなど、学内の情報基盤の整備、教育の情報化は、ますます進んでいます。

附属図書館では、こうした状況に対応できる学術情報リテラシーを身につけていただくため、情報リテラシー科目への協力のほか、独自に新入生オリエンテーションやテーマ別ガイダンスなど各種の利用者教育プログラムを提供しています。

#### 2. 情報リテラシー科目

情報リテラシー科目への協力は、この授業が外国語学部の新入生、編入生の必修科目となった平成 13 年度に始まりました。前期にリレー形式で行われる授業のうち、「情報検

索」の単元を担当しています。初年度は、レジュメによる講義 6 コマのみでしたが、14 年度からは、教科書を作成し、これを用いた講義 6 コマと、演習 12 コマの計 18 コマを担当することとなりました。さらに今年度は、採択に伴って導入された E-learning システムを利用して、演習を行いました。



今年度導入された E-learning システム  
(ログイン画面)

講義では、附属図書館の利用方法やサービスの紹介と、資料検索の基礎として、各種の目録や本学で使用している分類について解説し、演習では、1 人 1 台コンピュータを使用できる環境を生かし、ブラウザの使い方とインターネットでの学術情報の検索について実習を行っています。

特に、蔵書検索システム OPAC については、授業の最後には検索課題の提出を課すなど、より実践的な内容で、学習効果を高める工夫をしています。また、ブラウザで特殊文字を表示する方法や、専攻語の資料をどのように検索するかなど、本学特有の多言語情報リテラシーの説明にも力を入れています。

附属図書館にとって、新しく利用者となる新入生・編入生全員を対象に、附属図書館を知っていただく機会は、他では得難く、情報リテラシー科目は、利用者教育の大きな柱となっています。

また、4年間の授業を通して、新入生のコンピュータ・リテラシーが、年を追うごとに着実に上がってきているのを感じます。他方で、日々のカウンターなどでは、附属図書館の利用方法や資料の検索方法など、基本的な質問を受けることも多々あります。このことを受けて、授業の内容も、ブラウザの使い方などの技術情報から、蔵書検索をはじめとする情報検索へと、徐々に重点をシフトさせてきました。

しかしながら、1クラス50人を超える授業では、コンピュータ・リテラシーの個人差が大きくなってしまい、ブラウザの使い方に習熟していないために、蔵書検索で躓いてしまうという受講生も出てきます。学術情報のデジタル化が進む今、コンピュータ・リテラシーの差が、そのまま学術情報のデジタル・デバイスへと繋がらないように、個々人のスキル・能力に応じた利用者教育を提供していく必要があると考えています。



E-learning システムによる演習風景

### 3. オリエンテーション・ガイダンス

附属図書館が主催するオリエンテーションやガイダンスは、内容や開催時期を工夫することで、より多くの利用者に、きめ細かく対応することが可能です。このことから、情報リテラシー科目と相補い合うものとして、オリエンテーション・ガイダンスを利用者教育のもうひとつの柱と位置づけて、取り組んでいます。

オリエンテーションは、新入生を対象に、基本的な図書館利用方法の紹介と館内案内を内容として、毎年4月前半に集中的に行っています。これまでの経験より、昼休みの時間帯を希望する参加者が多いことから、今年度は、昼休みを中心に毎日開催したところ、5日間（定員は各回20名程度）の開催で100名を超える参加を得ることができました。なお、参加者アンケートの集計から、大学院生の参加が多いことが判りました。これは、情報リテラシー科目が学部生対象であることも要因のひとつと考えられます。

一方のガイダンスは、例年、ゴールデンウィークを過ぎると参加者が減少する傾向があることから、4月中にできるだけ多く開催できるようスケジュールを組みました。更に、ポスターのデザインを変更し、図書館外にも掲示するなど、広報にも力を入れて開催しました。結果、例年以上の参加者があり、ゴールデンウィークを過ぎてもあまり減ることはありませんでした。また、当初のスケジュールを過ぎても、リクエスト・ガイダンス（グループ単位での受付）や教室ガイダンス（ゼミ・授業単位での受付）の申し込みが多数あるなど、ガイダンスへの要求の高まりを見ることができました。

今年度前期は、図書の探し方を中心とした蔵書検索と、雑誌論文の探し方を中心とした文献調査の2種類のガイダンスを開催しました。多くの利用者が、検索課題として、各自の研究テーマや、自分では探しきれなかった資料・文献などをもって参加されました。

そのため、参加者との会話の中から個々のニーズ・レベルをくみ取り、その場でテーマを変更し、内容を組み立てなおすなど、高度な対応が必要になることもありました。臨機応変に対応することによって、資料の検索方法を学びながら、同時に、各自の探している資料へ到達できることもあり、参加者からは非常に好評を得ることができました。

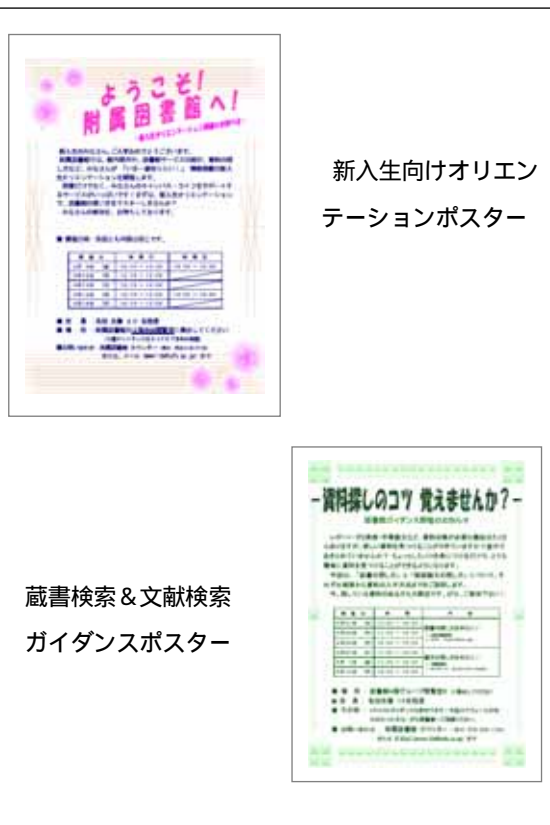
この成果をふまえ、今後も、テーマ設定などにも工夫をこらして、更に多くの利用者に有用なガイダンスを提供していきたいと考えています。

#### 4. 今後の取り組み

学術情報のデジタル化の波は、今後ともとどまることなく進んでいきます。日々、新しい学術情報の Web サイトが生まれ、新しい検索サービスが開始されています。洪水とも称されるインターネット上の情報から必要な学術情報を探し出す、書誌情報を的確に検索する、あるいは、検索結果をもとに資料を実際に入手する、といったスキル、学術情報リテラシーの習得を如何に支援するか。これは、附属図書館にとって、最優先課題のひとつであります。

情報リテラシー科目では、E-learning システムの利点をより活かした、個々の学生の能力に応じた多様なニーズに対応できる教材の提供をめざし、授業内容の検討を行っています。更に、留学生や新規着任教員などを対象としたオリエンテーションや、情報リテラシー科目からより上級へのステップアップ、ゼミと連携した主題検索のガイダンスなど、より多くの利用者が、それぞれの必要とする利用者教育を受けられるよう、様々なプログラムを企画していきたいと考えています。

附属図書館が提供する利用者教育についてのご意見、ご要望、また、ガイダンスのお申し込みなど、ぜひお気軽にお寄せください。



**お問い合わせ**

- ・ 附属図書館カウンターでの受付  
平日 9:00 - 17:00
- ・ メールによる受付  
メールアドレス [www-lib@tufs.ac.jp](mailto:www-lib@tufs.ac.jp)

## ホームページで学ぶ 図書館利用のあれこれ

附属図書館で公開している図書館の利用に関する様々なコンテンツを紹介します。

### ◆ 総合科目「情報リテラシー」テキストを公開しています！

授業で使用したテキストや資料をホームページにて公開しています。図書館の使い方から文献の探し方まで、すべての利用者の方に役立つ情報を提供しています。

[URL: <http://www.tufts.ac.jp/common/library/guide/literacy/literacy-j.html>]

#### 蔵書検索 利用の手引き

※ 検索できる資料は図書のみです。

- Menu -

1. [蔵書検索の概要](#)
- 1-1. [対応ブラウザ](#)
- 1-2. [画面の流れ](#)
- 1-3. [検索可能なコレクションと登録](#)

### ◆ OPAC（蔵書検索システム）使いこなしていますか？

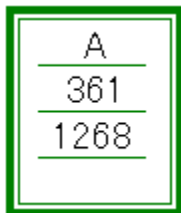
目的の資料が見つからないとすぐ諦めていませんか。キーワードの入力にはちょっとしたコツがあります。OPAC では検索できない資料もたくさんあります。蔵書検索ヘルプで確認してみたいかがでしょう。

[URL: <http://www-lib.tufts.ac.jp/opac/help.html>]

### ◆ カード目録の使い方、ご存知ですか？

カード目録には、分類目録・著者名目録・書名目録などの種類があります。図書館にはどんな目録があって、どのように検索するのか、ご存知ですか。

[URL: <http://www.tufts.ac.jp/common/library/guide/kensaku/card-j.html>]



請求記号ラベル

### ◆ 請求記号って何？

請求記号は、資料を識別するために付けられた番号（記号）のことです。それぞれの番号（記号）は、言語分類表・主題分類表にもとづいて付けられています。専攻語の言語記号や、興味のある分野の分類番号を知っていると、資料探しが容易になります。当館で採用している各分類表もこちらからご覧いただけます。

[URL: <http://www.tufts.ac.jp/common/library/guide/bunrui/bunrui-j.html>]

### ◆ 新聞や CD-ROM を探すには？

新聞や CD-ROM（図書の付属資料を除く）なども OPAC では検索できません。それぞれにリストなどを用意していますので、ご利用ください。

[URL: <http://www.tufts.ac.jp/common/library/guide/zousho-j.html>]

他にも色々なコンテンツを掲載しています。附属図書館ホームページよりご覧下さい。



## 図書紹介

『ボドゥエン・デ・クルテネ選集』Jan Nieciśław Baudouin de Courtenay *Dzieła wybrane*

T. - PWN Warszawa 1974-1990

本学外国語学部教授 石井 哲士朗

言語学における構造主義、機能主義のパイオニアとして知られるポーランド人言語学者の主要な業績をまとめた『選集』全6巻を紹介したい。

ポーランド科学アカデミーが「ポーランド人初の欧州レベルの言語学者 J. ボドゥエン・デ・クルテネ (1845 - 1929) の、批判的かつ必要不可欠な解説が施された選集刊行プロジェクト」をスタートさせたのは第二次世界大戦が終わって10年たった1955年のことだった。しかしこの企画は諸般の事情から頓挫。1969年、再度、編集委員会が組織される(ちなみに、この間、1963年にモスクワで2巻本のロシア語版『一般言語学論考選集』が出た)5巻本の予定は変更されて6巻本となり、全巻の刊行完了は1990年。最初の企画から実に35年の歳月を経て、巨人の全貌が万人の閲覧に供されることになったわけである。各巻の内容をかいつまんで記してみよう。

第1巻(1974)は、「編集委員会まえがき」のあと、編集主幹 W. ドロシェフスキの「言語学者にして思想家 J. ボドゥエン・デ・クルテネ」と M. ヤシンスカ編「J. ボドゥエン・デ・クルテネ著書目録」のあとに、ボドゥエンの自選であった『言語学概要』(1904)の復刻版が収録された。

第2巻(1976)は、P. ズヴォリンスキ「ポーランド語歴史文法の先駆けとしての J. ボドゥエン・デ・クルテネ」に続き、彼の学界デビュー作ともいえる『14世紀以前の古ポーランド語について』(1870、ライプツィヒ、露文)を収める。面白いことに、付録として、彼自身が執筆し、ペテルブルグの雑誌に匿名で投

稿したとされる書評が加えられた。

第3巻(1989)は、Z. トポリンスカ「序文」と T. ロガー「スロヴェニア方言学者としての J. ボドゥエン・デ・クルテネ」のあと、「レジア方言音声試論」(1875)を含む方言学関係の論文、報告、資料集等8編から成る。

第4巻(1990)は、A. ハイנטツ「言語理論家、印欧語学者としての J. ボドゥエン・デ・クルテネ」のあと、一般言語学、印欧語学関係著作23編を収録。

第5巻(1983)は、S. スコルプカ「編集覚書」に続き、ポーランド語学関係著作11編、スラヴ語学関係著作8編と解説から成る。

第6巻(1983)には、J. クルチツカ・サロニ「言論人としての J. ボドゥエン・デ・クルテネ」、および彼の時事・社会評論23編。巻末に、W. クルチツキの解説。

最終巻に収められた論考は、後のノーベル賞作家シェンキエヴィチらとの論争、オーストリア当局との確執、ロシア官憲による拘禁、少数民族派に推されての初代大統領選立候補など、数々のエピソードで語られた人間ボドゥエンの素顔を知る手がかりになる。読者は改めて、三国分割期からポーランドの独立回復に至る時代を生き抜いた碩学ボドゥエンが、また勇気ある行動人であったことに驚かされる。

### 【編集注】

ご紹介いただきました資料の請求記号を、お知らせします。興味のある方は、ご覧ください。

『選集』S61/810/1~6 第5巻は欠本です  
(第5巻は東大などで所蔵されています)

このほか、以下の文献も所蔵しています。  
ロシア語版『一般言語学論考選集』 S/810/1~2

日本人による台湾語の本格的な研究教育は明治 28 年 7 月、日本による台湾領有の直後に開始された。領台初期、台湾総督府の言語政策の根本思想は、台湾人をして日本語を学ばしめ、日本人もまた台湾語を学び、而して日台人双方の意思疎通に不便なからしむることにあった。

夙に明治 29 年 2 月、台湾総督府民政局学務部(後の民政部学務課)は『新日本語集』を出版している。この書は「台湾土人ニ我現行ノ国語ヲ教ヘ又本国人ガ台湾土語ヲ学ブノ用ニ供センガ為メ撰修」(同書『緒言』)された僅々 86 頁の簡便な対訳式語学教科書に過ぎないが、ここには後に民政局より公布されることになる台湾語発音仮名表記および八声符号の原型が採用されており、以後の台湾語教育の基礎が固まっていたことが判る。

そもそも書名の『新日本語集』は、「新日本」の言語なのか、或いは、日本の「新しい言語」なのか判然としない。けれどもこの書名から、明治の新生日本に加わったあらたな言語……台湾語の教育研究に取り組まんとする先達の意気込みが伝わってくるようだ。

『緒言』を見ると学務部員として楫取道明、井原順之助、関口長太郎、中島長吉、桂金太郎、平井数馬らがこの書の編集に参加していることが知られる。この年の正月、「六氏先生」は芝山巖において凶刃に斃れていた。

本書の実質的な企画立案は初代学務部長伊沢修二であつたに違いない。伊沢は領台初期

の言語政策を策定したその人である。伊沢は明治 28 年 6 月に台湾に赴任し、明治 31 年 6 月に学務部長を解任されているので、その在台時代は僅か 3 年足らずであつたが、その任期中、以後の台湾語教学の発展に多大な足跡を残すこととなった。

明治 29 年 11 月総督府発行『台湾十五音及字母詳解』は台湾語の発音の基準を示す重要な一里塚となった。また明治 31 年 12 月総督府発行『日台小字典』は小川尚義らの編纂によるが、後の偉業『日台大辞典』、『台日大辞典』の礎となったものである。これらの重要な著作はみな学務部時代の伊沢修二の発案と唱導に係るものである。

伊沢の台湾語に対する最大の功績は小川尚義を見込んで台湾に呼び寄せたことであろう。小川は伊沢の招聘に応じて明治 29 年 12 月に台湾に渡り総督府囑託に任ぜられ(同僚に伊能嘉矩がいた)以後台北帝大教授を兼務するなど、敗戦によって台湾を離れるまで 50 年になんなんとする年月を台湾諸言語の研究に奉げた。領台時代の台湾語界をリードした杉房之助、中堂謙吉、平沢平七、岩崎敬太郎などは小川尚義の教導の下、総督府学務課において育った俊秀達である。

上述の資料は今では古書店などに出ることも殆んどない。旧帝大系、旧師範学校系の図書館に収蔵せられているものを見ると、なかに伊沢修二自身あるいは台湾総督府民政部より寄贈された旨の書き込みがあるのを見出す。

今を去ること既に 100 年。わが外大図書館にも『日台大辞典』『台日大辞典』両鉅冊が収蔵

されており、今もなお台湾語学習研究の上で不可欠なパラダイムとなっている。

【編集注】

ご紹介いただきました所蔵資料の請求記号をお知らせします。興味のある方は、ご覧ください。

『日台大辞典』（復刻） 上 B/a8/515104/5

王文庫/C/76219

下 B/a8/515104/6

王文庫/C/76220

『台日大辞典』 上 C/ /914/1

4.6/F4/Ta25/1

下 C/ /914/1

4.6/F4/Ta25/2

## 展示会に寄せて

### 現代史に翻弄された本たち

本学外国語学部助教授 岡田 知子

本学図書館所蔵のカンボジア語書籍の貴重コレクション 11 点は、1960 年代に出版されたものがほとんどで、やっと半世紀を経たばかりである。しかしこの間に、カンボジアは大国の思惑に揺さぶられ、5 回に渡って国家体制が変わり、戦争と混乱のうちに数々の出版物も散逸した。現在、本国はもちろん国外でも 1960 - 80 年代の出版物を探すのは容易ではない。上記 11 点は、本学外国語学部特設日本語学科に 1971 年から 1975 年まで在籍していたカンボジア人留学生リム・リムチ（林林基）氏から 1975 年に寄贈されたものである。

独立後の 1960 年代、国家元首となった若きシハヌークは、国内では、王制社会主義政策を打ち出し、対外的には中立政策を掲げ、東西冷戦の構造の中で両陣営から援助を引き出して、社会発展を促進した。これによって

都市文化が発達し、出版分野も黄金時代を迎えた。都市住民は、新聞やグラビア雑誌を片手に朝食を楽しみ、大学では仏教研究所が編集した古典文学や仏教研究書が使用された。学生たちはアンコール王朝を題材にした歴史小説やフランスの翻訳小説を読み、作家をめざして文学賞に応募する者もいた。主婦は欧米の香り漂う洒落た表紙の料理や洋裁の本を見て、良妻賢母としての腕をあげ、子どもたちは、カンボジア版ラーマーヤナであるリアムケーの漫画や中国活劇小説を貸し本屋で読みふけていた。

だがシハヌークの政策は徐々に立ち行かなくなっていく。共産勢力のクメール・ルージュが地方の解放区で活動を展開し、内戦が激化していった。1975 年、ついにポル・ポトを中心とするクメール・ルージュが新政権を誕生させる。彼らは、旧政権までの社会文化的

価値、人間関係を根本からすべて否定し、極端な共産主義社会を急進的に建設しようとした。それはかつての社会制度、貨幣や市場による経済活動、伝統文化、宗教、学校教育等の破壊を意味した。統制は移動の自由、衣服や髪型、言葉遣いにまで及んだ。栄養失調、病気、過労、処刑などのために、国民の4人に1人が命を落とした。出版物はもちろんのこと出版文化に関わってきた人たち - 作家、芸術家、技術者、研究者、司書、読者 - も「抹消」されてしまった。

4年後、同政権が崩壊し、ベトナム指導型の新しい社会主義国家が成立すると、文学も芸術も出版物もみな、党の宣伝道具としてのみ復活した。空白の4年間を取り戻すかのよ

うに1980年代は出版物で溢れた。1990年代初め、世界情勢の変化からカンボジアも複数政党制、市場経済社会へと動き始めた。前政権時代の書籍は、恥ずべき過去の遺物とばかりにゴミとして束ねて捨てられた。

本学図書館には、AA研の1960年代の書籍約400冊や、COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」により購入した800冊の新刊書籍を所蔵している。また外国語学部のカンボジア語研究室では、本学名誉教授である坂本恭章先生の1960年代のコレクション1200点、1980年代から現在にかけての約2000冊がある。これらを総合すると、本学は世界でも有数のカンボジア語出版物を所有している機関である



当館所蔵の貴重図書（一部）

請求記号（左から）E51/a6/3、E51/9E51-8/N576、  
E51/9E51-8/I88/1

#### 【編集注】

文中の坂本恭章先生のコレクションに関するお問合せは、カンボジア語研究室あてにメール（cam-staff@tufs.ac.jp）をお送りください。

本稿でご紹介いただきました文献を含むカンボジア語の資料を、今秋開催する予定の貴重書展示会『出版文化を通して見るカンボジア現代史』にて展示いたします。

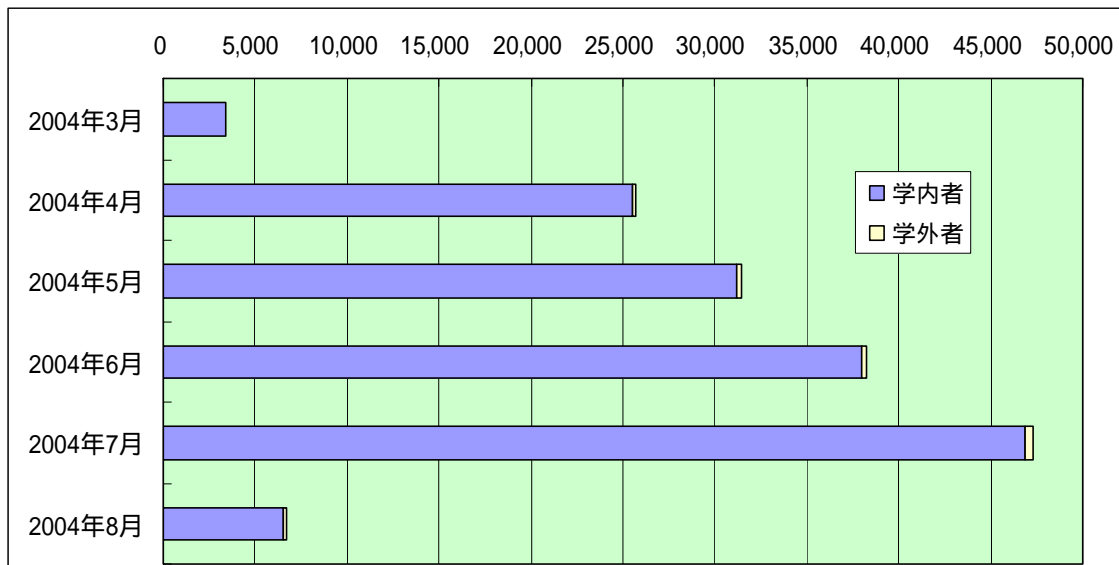
興味のある方は、是非、ご来館ください。

詳細につきましては、14ページの図書館講演会及び貴重書展示会のお知らせにてご確認ください。



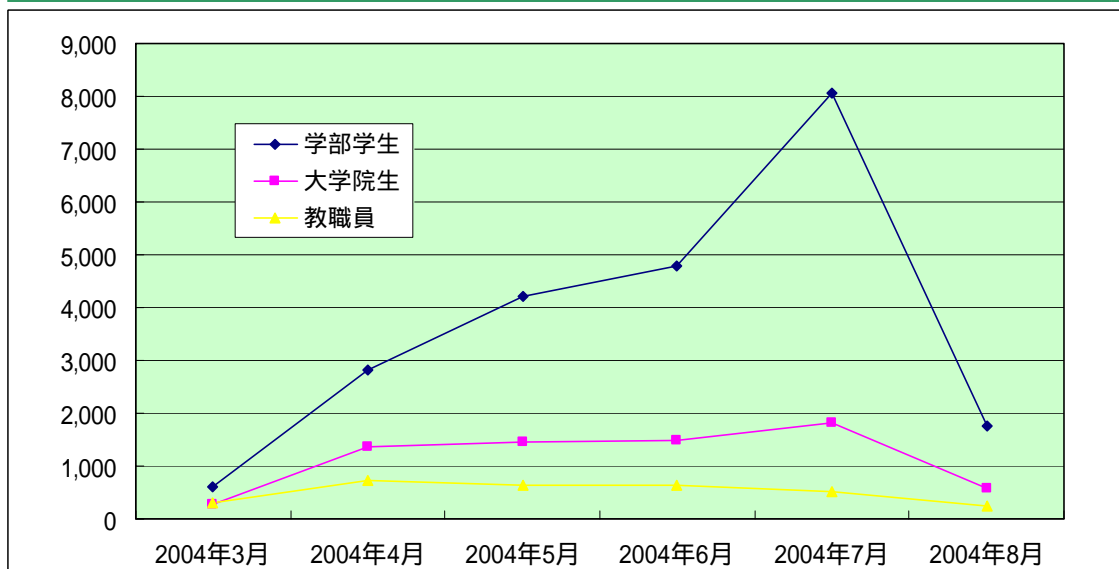
# 図書館統計

## 月別入館者数統計



	2004 年 3 月	2004 年 4 月	2004 年 5 月	2004 年 6 月	2004 年 7 月	2004 年 8 月
学 内 者	3,357	25,509	31,147	37,941	46,848	6,525
学 外 者	69	165	257	290	465	158
合 計	3,426	25,674	31,404	38,231	47,313	6,683

## 貸出冊数統計



	2004 年 3 月	2004 年 4 月	2004 年 5 月	2004 年 6 月	2004 年 7 月	2004 年 8 月
学部学生	603	2,829	4,215	4,781	8,051	1,323
大学院生	285	1,376	1,451	1,491	1,833	348
教 職 員	294	719	623	651	518	94
合 計	1,182	4,924	6,289	6,923	10,402	1,765

# 図書館からのお知らせ

## 図書館講演会並びに貴重書展示会のお知らせ



附属図書館では、平成12年度から公開講演会を図書館活動の一環として行っております。

今年は、国立西洋美術館長でもある西洋史学者の樺山紘一先生をお招きし、多摩地区の市民、大学生・教職員を対象に下記の要領で講演を行います。

また、同時期にカンボジア語図書資料による貴重書展示会も開催いたします。

多数の皆様のご来場をお待ちしております。

### < 講演会 >

テーマ 『知と技のつどうところ - 図書館と博物館と博覧会 - 』  
講 師 国立西洋美術館長・樺山紘一先生  
日 時 平成16年10月27日(水) 16時30分～18時00分  
場 所 東京外国語大学「マルチメディアホール」(研究講義棟1階)  
お問い合わせ

東京外国語大学 附属図書館総務係

電話 042-330-5193

FAX 042-330-5199

### < 貴重書展示会 >

テーマ 『出版文化を通して見るカンボジア現代史』  
日 時 平成16年10月25日(月)～11月22日(月)  
9時～21時45分  
ただし、土曜日は9時30分～16時45分、  
日曜日・祝日は休館です  
場 所 東京外国語大学 附属図書館1階貴重書展示コーナー

## 平成16年度前期図書館活動日誌

- 4月 8日 入学式（館報「カスターリア」等配布）
- 4月 9日 平成16年度図書館オリエンテーション（全5回 ～4月15日）
- 4月16日 国立大学図書館協会東京地区協会総会2名参加  
（於東京芸術大学）
- 4月21日 利用者ガイダンス（全6回 ～5月10日）
- 6月 9日 平成16年度第1回図書館委員会
- 6月14日 EUIJ 図書WG会議1名参加（於津田塾大学）
- 6月22日 平成16年度情報リテラシー科目附属図書館担当分「情報検索講義・演習」  
（6月24日、29日、7月1日の4日間）
- 6月23日 平成16年度第1回選書委員会
- 6月30日 第51回国立大学図書館協会総会2名参加（於大阪 ～7月1日）
- 7月16日 東京地区国立大学附属図書館事務長懇談会（於東京医科歯科大学）
- 7月28日 平成16年度第2回選書委員会
- 7月28日 NII 目録システム（地域）講習会 雑誌コース1名参加  
（於国立情報学研究所 ～30日）
- 9月15日 平成16年度第2回図書館委員会
- 9月22日 国際基督教大学との相互協力に関する協定調印式



国際基督教大学図書館との協定調印式



情報リテラシー科目授業風景

## 編集後記

館報『カスタリア』通算 8 号はインターネット版です。通算で数えて奇数号は紙媒体、偶数号はインターネット版になっています。

近年、インターネットなど電子媒体による情報がどんどん増えています。図書館の大きな役割の一つに、学術情報を収集・整理し、教育・研究のために提供するということがあります。紙媒体の図書館から電子媒体の図書館に今後はさらに進んでいくものと思われます。

本学図書館では、情報リテラシー授業にも積極的に参画しております。本号の特集「学術情報リテラシー教育と附属図書館」(情報サービス係)のレポートは、図書館が情報リテラシーについてどう取り組んでいるかを述べたものです。

先日、図書館の一日の入館者数が移転後初めて 3 千人を突破いたしました。図書館員一同とても喜んでおります。おひとりでも多くの方に利用されることが一番大切なことだと思っています。そのために館内の施設整備、蔵書の充実などに目配りしておりますが、利用者の皆さんからの視点も大切だと考えますので、ご意見・ご要望などございましたら是非お寄せください。

Castalia : 東京外国語大学附属図書館報 第 8 号 : インターネット版 第 4 号

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/gaiyo/kanpo/castalia-8.pdf>

2004 年 9 月 30 日発行

発行 : 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL / FAX : 042 - 3305193 (TEL) 042 - 330 - 5199 (FAX)

ホームページ : <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

編集発行人 本橋文次郎

編集長 高杉泰穂

編集委員 山田穰

千葉亜紀子

坂牧一博

